

〔書評と紹介〕

菊池勇夫著

## 『近世北日本の生活世界 ― 北に向かう人々』

上田 哲司

本書は、近世の北東北・道南地域の民衆の生活世界が、和内地と蝦夷地の境界を越えて広がっていく様相を扱った菊池勇夫氏による諸論考を集め、一著と成したものである。その構成は以下のようなになる。

- 序 章 北の民衆の生活世界へ
  - 第一章 鷹の捕獲技術について
  - 第二章 寛保の松前大津波
  - 第三章 蝦夷地のなかの「日本」の神仏
  - 第四章 南部屋（浅間）嘉右衛門と飛驒屋
  - 第五章 ラクスマン来航と下北の人々
  - 第六章 『模地数里』に描かれた松前
  - 第七章 松浦武四郎『蝦夷日誌』にみる松前・蝦夷地の沿海社会
  - 第八章 万延元年蝦夷地場所引継文書の紹介と検討
- あとがき

まずは、本書の内容について紹介しよう。

第一章は、北日本における鷹の捕獲方法について論述している。弘前藩においては、「巧者」が小屋を設けて鷹待ちをし、ムソウアミを用いて捕獲する手法が知られ、特に真名板淵が逸鷹の産地として誉れ高く、

弘前藩は鷹の繁殖のため植林まで行っていた。松前藩においてはアイヌの人々が巢鷹を捕らえ、松前藩の鷹匠に引き渡していた。盛岡藩では藩士の中から「鷹侍」を任命し、地侍を動員するなどして若黄鷹を捕獲していた。

第二章では、寛保元年七月一九日、渡島半島西岸や本州の日本海側に押し寄せた、いわゆる寛保大津波の被害状況や、その後における伝承・記憶のされ方などを論述している。

第三章では、蝦夷地における日本の神仏の展開を、アイヌ民族との関わりを含め、歴史的に捉えることが課題としてかけられ、その題材としてウス善光寺と義経物語が取り上げられる。前者においては、シヤクシャインの戦いの少し前、松前藩の許しを得て蝦夷地を歩き善光寺まで至った円空の作仏活動や、平等無差の眼差しをアイヌにまで向けたという貞伝作とされる仏像が安置されていることが紹介され、善光寺如来の信仰がアイヌの人々にもある程度受け入れられていたことが指摘される。東蝦夷地が幕領化され、ウス善光寺が官寺化されると、この信仰を素地に、さらなるアイヌ改宗が推進されたとする。後者においては、もとは藤原秀衡のもとにいた幼年の義経が蝦夷島へ渡ってかねひら大王の娘と契りを結び、その協力によって虎の巻（兵法書）を盗み、奥州へ帰還を果たしたという御伽草子『御曹司島渡』の物語が松前においても語られているに過ぎなかったが、シヤクシャインの戦いが起こると、実際にこの戦いに関わったアイヌ首長オニビシの名前から、鬼形のこんびら大王が連想され、オニビシの先祖はこんびら大王とされ、高館を逃れ蝦夷島に落ち延びた義経は大王の娘と結ばれて城を構えたという物語へと変質

したと指摘される。さらに、アイヌが義経を畏れ敬っているという言説が和人のなかでも語られるようになり、アイヌ民族の文化神・オキクルミを義経と同一視するような言説も産まれた。これは和人の付会に過ぎなかったが、蝦夷地の幕領化後は、現在の北海道平取町には近藤重蔵によって義経神社が建てられた。このように、幕領化が契機となり、日本の神仏の浸透が強化されたことが確認される。

第四章では、飛驒屋大畑店の下代（支配人）を勤め、辞したのち、松前に渡った南部屋嘉右衛門を取り上げる。同人は、江戸や大坂の商人、京都の公家や江戸の大奥と結びつき、蝦夷地産物の流通ネットワークを作ろうとした。その過程で飛驒屋と対立し、松前藩の財政・勘定方と結びつくことで対抗しようとしたが、幕府に訴えられ、松前藩にも見放され、敗訴・死刑となった。このような権力と商人が入り組んだ構造が田沼時代の特徴であると指摘する。

第五章では、菅江真澄のラクスマン来航の記録を主に取り上げる。松前藩がラクスマン来航への対応で大騒ぎしている最中、真澄は松前を離れ下北へと移った。真澄の記録は、水先案内人としてエカテリナ号に乗って大黒光大夫と同行した松前の船頭・久八が記した「漂流人聞書」と共通する内容であることから、真澄が下北の大畑あたりを渡り歩いているときに誰かに見せてもらって記録したと指摘する。同じく、「漂流人聞書」を典拠にしたと思われる記述が、真澄の友人でもあった大畑の村林鬼工による『原始謾筆風土年表』にも見られる。大畑は飛驒屋久兵衛の根拠地がある地であり、松前の船頭から多くの情報もたらされ、飛び交っていたことが伺える、と指摘される。

第六章では、江戸から松前への往復の旅の際に描かれた『模地数里』というスケッチ風の風物図集（国立公文書館内閣文庫蔵）を取り上げ、それが江戸の住人・嶽丈央斎による『陸奥日記』（東北大学所蔵）と内容が対応関係にあり、筆跡も近いことから、同一人の作であると指摘した上で、その絵解きを通して近世後期の松前における女性や馬などの様相の一端を明らかにする。前者について、央斎は「松前ハ女の多き処」「女商人多し」としている。これは、男たちが蝦夷地に出稼ぎに行っていたためであるとし、女の領分は魚や野菜を売り歩く小商人であるという。後者については、松前城下では馬子が一人につき十数頭の馬を用い、近在の村から薪や炭を運搬し販売するものがあり、それが都市住民の燃料の供給源となっており、馬は雪が降る季節も含めて放し飼いで、必要なときに捕らえ、用事が済むと放つことが指摘される。

第七章では、近世北海道（松前・蝦夷地）の沿海社会が地域差を含めて全体としてどのようなすがたであったか、松浦武四郎による弘化・嘉永年間の踏査の観察記録『蝦夷日誌』を使って俯瞰する。これは、観察範囲がカラフト、クナシリ、エトロフまで及び、沿海社会の実情を具体的に把握できる史料であるという。この頃、蝦夷地内部へと入り込む和人の季節移動もしくは定住化が大規模化し、昆布漁・鯨漁にさいして直接労働に従事する者だけでなく、彼らの現金収入を目当てに、物売りの商人、髪結、料理屋、遊女稼ぎの者などが集まり、季節的にせよ、繁華な町場的な空間が形成されていった。こうした和人社会の経済圧・人口圧がアイヌ社会に押し寄せ、東蝦夷地の六ヶ場所では、アイヌの人々も日本語・貨幣を使用するようになっており、松浦は、アイヌの人口は急

減しほどなく消えると認識していたことが指摘されている。

第八章は、万延元年（一八六〇）、仙台藩が幕府から東蝦夷地のうち、シラオイ（白老）、トカチ（十勝）、アツケシ（厚岸）、ネモロ（根室）、クナシリ（国後）、エトロフ（択捉）の六ヶ場所を領地として与えられた際、引き継ぎ事項を仙台藩側が書き留めた記録である「庚申万延元年蝦夷地御領分御引受留」（国立公文書館内閣文庫所蔵）を取り上げ、その史料紹介を兼ねつつ、特にクナシリ場所について、当時の実情を復元している。

内容紹介はここまでとして、ここで、少しく、菊池氏のこれまでの研究を振り返ってみよう。旧盛岡藩領域の出身である菊池氏は、自身の最初の論集であった『幕藩体制と蝦夷地』（雄山閣、一九八四）の「あとかぎ」において、自身の郷里の地域史に関心を持ったことから研究者としてのキャリアをスタートさせ、当初は郷里の思想家・安藤昌益に関心を持っていたことを述べている。この頃、一揆に加わったかどで盛岡藩に捕らえられた百姓・三浦命助の「獄中記」が収録された『民衆運動の思想』と、安丸良夫によるその解説に触れ、氏の関心はまもなく三浦へと向かったのだという（本書二頁）。この時点で三浦の獄中記には豊富な研究が蓄積されていたが、菊池氏は、三浦が家族の松前移住を願っていたことに着目し、なぜ「松前」なのか、という視点より新たな研究を発表した（「三浦命助の松前移住論の史的意義」『歴史評論』、一九七七）。この研究がひとつのきっかけとなり、菊池氏の関心は北奥の民衆による「松前稼」に向かったのだという。そして、その出稼者による横暴な振舞が、アイヌ民族の蜂起―クナシリ・メナシの戦いを招いたこと

を知って大きな衝撃を受け、その関心は蝦夷地研究へと広がったのだという。このことは『十八世紀末のアイヌ蜂起』（サツポロ堂書店、二〇一〇）の「あとかぎ」でも述べられている。

このように振り返ったとき、本書は、一九七七年に刊行された上記論文の延長に位置づくことが了解されよう。この四〇年の間に、氏は、上記論文が収録された『幕藩体制と蝦夷地』のほか、『北方史のなかの近世日本』（校倉書房、一九九二）、『アイヌと松前の政治文化論―境界と民族』（校倉書房、二〇一三）などを刊行したが、これら諸論文集と本書はすべてが一連のものと把握することも可能である。実際に、本書の各章のキーワードとも言うべき「鷹」「義経伝説」「近藤重蔵」「飛驒屋」「菅真澄」「ラクスマン」「松浦武四郎」などは、最初の論集である『幕藩体制と蝦夷地』においても論点とされていた。本書に収録された各論文は、すべてこれまで発表されてきた菊池氏の北方史関連の論文の続編のような位置づけとなるのである。

本書は、こうした菊池氏の一連の仕事を総体的に眺めたときに、より一層、その価値が明らかになるといえよう。本書は数年前に出版された菊池氏による『東北から考える近世史』に、「内容的に近いことから、同じ清文堂出版より出した」（本書二八六頁）ということだが、むしろ『幕藩体制と蝦夷地』からの連続性こそ、研究史的には重要であろう。本書は、現在の北東北と北海道の地域的一体性を捉えた菊池氏のこれまでの研究に、さらなる厚みを加えた一書なのである。

こうした菊池氏の研究視座は、この四〇年間の内に、北方史と呼ばれる研究潮流を生み出し、北海道・東北史研究会の結会を促して現在に

至っている。その北海道・東北史研究会において、宮本花恵が第三章に関連する最新の研究を提起しているので、この場をもって簡単に紹介したい（同「津軽今別本覚寺貞伝上人伝を巡って」『北海道・東北史研究』一一号、近刊予定）。これは、菊池氏が「本書の刊行によって、北方史に関して私自身がすべきことはほぼ形にしたのではないかという思いがしている」が、まだ「終わったわけではない。世代間の断絶にならないよう、バトンタッチしていけるような仕事をめざしてみたい」（本書二八五頁）と述べていることもあり、菊池氏からの「バトン」が評者と同世代の研究者にも受け継がれていることを示すためにも、あえて記すものである。

宮本は、貞伝が実際に蝦夷地へと渡りウス善光寺へと至ったとされてきた従来の通説に疑義を示している。宮本によると、下北半島では貞伝の信仰が篤く、下北の民衆が蝦夷地へと渡り、ウス善光寺を拠点にその信仰を広めていったと論じている。また、クナシリ・メナシの戦いでは、クナシリのアイヌ・モシリハクが「ツクナイ」の一つとして、貞伝の万体仏を差し出させたことも指摘されている。菊池氏が第三章で論じたように、必ずしもアイヌ側が強制的に日本仏教に改宗されたとは言いがた、日本仏教を理解していたアイヌもいたことがうかがえよう。

さて、屋上屋を架すようではあるが、本書の内容について、評者からも簡単な補論となる指摘を述べておきたい。

第二章に関連し、評者としては、大正七年（一九一八）に渡島教育会によって編纂された現在の渡島支庁管内の各村・各部落の地誌である『函館支庁管内町村誌』（北海道立文書館所蔵）を紹介したい。ここには、

原口村・江良町村・清部村などの諸村に伝わる伝承が掲載されている。これによると、これら諸村は、戦国時代から江戸時代のはじめ頃に南から移住してきた和人によって形成されたが、寛保大津波によって一時的に壊滅し、その後、災厄をまぬがれたわずかな者たちによって復興が遂げられたのだという。菊池氏は、寛保大津波が半世紀余り経過した後も記憶されている事を指摘しているが、口頭伝承のレベルでは近代まで伝承されていたのである。これらの伝承は、鈴江英一氏によって、和人の村の開村経緯を明らかにする、という論考の中で検討されている（同「和人セクベイの子孫たち」桑原真人編『開拓のかけに』三省堂、一九八七）が、これらの伝承からは、寛保大津波をめぐる「記憶」についても抽出することが可能なのである。近代へと連続的に受け継がれた記憶のメカニズムについて、さらなる研究が深化されることを希望する。

以上、雑駁ではあるが、本書の紹介とさせていただきます。評者自身も、菊池氏から「バトン」を受け継げるよう願って、この拙い書評を閉じたいと思う。

（二〇一六年十一月七日刊、A5判、三〇六頁、定価七八〇〇円＋税、清文堂）

（うえだ・てつじ 北広島市エコミュージアムセンター学芸員）